

「主体性がない」とされる私の主体性

周知のように、各教科の観点別評価においては、「知識・技能」「思考・判断・表現」と並んで、「主体的に学習に取り組む態度」が評価されます。そのためには、「粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」（国立教育政策研究所『教育評価の在り方ハンドブック』）をみとることになりますが、実際どのように評価するべきか、なかなか困難であるという声が多くあります。「主体的に学習に取り組む態度」はそれだけでは評価しにくく、「知識・技能」の獲得過程や、「思考・判断・表現」と不可分であるということも指摘されます。次期の学習指導要領の改訂において、この観点の評価に関して、変更する方針がある旨が伝えられています。

あらためて「主体的」に学習に取り組んでいるとはどういう状況かを考えてみたいと思います。一般的には、人から指示されなくても、自分から進んで学習に取り組んでいる様子が目に浮かぶでしょう。反対に、例えば、学ぶ意義がわからないので、いやいや学習している状態、あるいは、面白くないので、学習しない状態。このような場合は「主体的」に学びに取り組んでいないとされるでしょう。しかしながら、前者の子どもについては「学ぶ意義がわからない状況の中で、主体的に悩み、学習するのを躊躇している」様子、後者については「主体的に考えたら、どうしても面白いと思えない状況の中で、主体が学習を拒否している」様子ととらえると、実は子どもの中で「主体」がもがき、うごめいているともとらえられるのではないのでしょうか。

ここで、思い浮かぶのは、「中動態」という概念です。哲学者である國分功一郎氏は、インド＝ヨーロッパ語族の言語に、「能動態」でも「受動態」でもない「中動態」がかつて存在したことを指摘し、それをもとに「中動態の世界」について検討しています（國分功一郎2017『中動態の世界 意志と責任の考古学』医学書院）。國分（2017）は「能動と受動の対立においては、するかされるかが問題になる」一方で、「能動と中動の対立においては、主語が過程の外にあるか内に

神藤 貴昭（本学教職研究科教授 教育心理学）

あるかが問題になる」と指摘しています。ここから、実は人間の行為は、「する」「される」では単純にわりきれないのにもかかわらず、現代の社会では、そのようにわりきってしまっているのではないか、という示唆が得られます。主体的か受動的か、という評価の視点も同様に考えられるでしょう。「中動態の世界」を念頭におくと、「主体的に学習に取り組む態度」を評価するにあたっては、子どもが「他者からいわれなくても、自発的に学んでいるか」というよりは、「教材・教育内容と自己がどんなかたちで出会っているか」をみとるべきかもしれません。「学ぶ意義がわからない状況の中で、主体的に悩み、学習するのを躊躇している」様子ならば、もがき苦しんでいる「主体」が存在するわけなので、「主体的ではない」とか「主体的に学んでいない」と外から言われる筋合いはないとも言えそうです。主体のもがき苦しみや、その結果の沈黙は、どのように「評価」にのせられるのでしょうか。

さらに言うと、「主体的」「受動的」と二分することによって、行動をしないことの責任が、「主体性がない」とされる行為主体にすべてかぶさってくることにもなります。ある「過程」の中にいる主体ということは考慮されにくくなります。もちろん、すべて「過程」のせい、「状況」のせい、「他人」のせいにするのも、大きく間違っているでしょう。ある状況の中にいたとしても、行為を決定するのに主体は関与しているからです。

このように、外部から、行為者が「主体的」かどうかを判断することは困難であるし、そもそも「あなたは主体的だ」「あなたは主体的でない」とフィードバックをすることの意味も考える必要があるでしょう。「あなたと〇〇（教育内容）の関係ができあがりつつあるね」「〇〇と出会うためにもう少しねばってみようか」というような、形成的な評価、教育内容との出会いのためのアドバイスのするなら意義があるかもしれません。

「主体性がない」などと評価されると、子どもは心外であるかもしれないな、とかねがね思っていた次第である（自分がそうだったの）。